綿虫（わたむし）

月明かりの中、しなやかな体つきをした山犬が、山脈の頂に触れるかいなかのところで跳躍する。夜色の毛皮は星で輝き、豊かな尾は風を切ってなびく。山の頂を蹴るとは、かなり大きな山犬だ。夜の山犬は、こちらを振り返ることなく、山の彼方へ消えてしまった。

そんな夢を、〈野駆け〉のダーングは、朦朧とした意識の中で見た。

うずくまる彼は、重い瞼を開けた。森の木々が、冷たい夜空を細かく分断している。その隙間を通り抜けて、銀の月光が零れ落ち、塵埃をちらつかせていた。

これは、綿虫だ。白い体毛に覆われた小さな虫は、疲れた男を取り囲み、その肩に、胴に、積もっていた。

ダーングは、瞬きせず、綿虫を見つめた。耳の奥で荒波が聞こえる。後悔と焦りで爆ぜる内側の音だ。それに比べて、目の前の景色はあまりに穏やかで、彼は宙に浮くような空しさを覚えた。

綿虫は忍び足で体を這ってくる。緑の月（五月）を過ぎた頃に出てくる綿虫は、服につけたままにしておくと、繊維を食べ、やがて小さな穴を開ける。

ダーングは、だが、まとわりつく綿虫を払い落とさなかった。休息の前、綿虫除けの香草の汁を擦り付けておいたのだ。呑気にくっついた綿虫は、やがて気をおかしくし、死に至るだろう。

彼は、黙って目を閉じた。

ドナウトという師の人に会ってから、ダーングは一変した。寝具ではなく森

の懐に抱かれているのも、上司ではなく野生の獣に対して神経を尖らせているのも、下水ではなく何日も洗っていない自分の体臭に鼻が曲がりそうになっているのも、望んでやっていることではなかった。

ダーングは頬を掻いた。伸びきった毛に指が埋まる。とたん、恐怖で指先は震えた。

金糸の施された白い外衣が、頭の中でちらつく。ダーングは掴みかかろうとするのだが、師の人の外衣は、あっけなく手を滑りぬけるのだった。

◆

狩りの村の宿、『おこじょの瞳』で師の人ドナウト話したのは、数週間前のことだった。

ダーングは、〈野駆け〉としての役割をまっとうしようとしていた。王家打倒をもくろむ〈緑の巨人〉が求める『デイゴンネー竜古書』、通称『資料』を引き取るのだ。そうすれば、〈緑の巨人〉が密偵として使う〈目〉の動きも、ドナウトと見習いたちから逸らすことができる。そう持ち掛けたダーングだったが、ドナウトは冷笑を浮かべた。

「王家の犬が」

彼は言った。きっと、ダーングの真の目的も、彼は薄々理解しているのだろう。王家光の民（シスルア）が、『デイゴンネー竜古書』に対して怯えを抱いている、ということも。

ドナウトは、ダーングの申し出を拒絶し続けた。〈野駆け〉は、これ以上の交

渉は無意味と認め、宿の『二本槍』に向かった。

『二本槍』は、〈野駆け〉のための情報交換所だった。仲間内で指定している、いわば隠れ家だ。ダーングが見習いたちを『おこじょの瞳』から『二本槍』に移した理由も、〈野駆け〉の保護下に置くためだった。

見習いをひそかに見守りながら、ダーングは計画を練り直した。

『おこじょの瞳』で追手の師の人二人に見つかったドナウトは、『三日後に師の村の自宅に戻る』と約束した。だが、ドナウトは約束を果たさないだろう、ダーングはそう思った。ドナウトはきっと、つくりの村か商の村へ向かい、どちらかの村で行方をくらます。「消える覚悟ができている」、彼は最後にそう言っていた。

問題は、『資料』がドナウトとともに消える可能性と、緑の巨人の動向だった。彼らもドナウトの発言を鵜呑みにはしないだろう。ドナウトが行方をくらます前に、緑の巨人よりもさきに『資料』を手にしなければならない。

だが、夜も更けてきたころ、静かに雪が降りはじめた。

ダーングは、次々と降る白い粒を、呆気に取られて窓から眺めた。暖かい花の季節の雪は、不吉なものに思えた、彼は、この天候によって起こりうる様々な可能性を考えた。〈目〉はこの天気を好機ととるだろうか、それとも逸機か。

雪の静寂の中、ダーングは一睡せず警戒にあたっていたが、結局〈目〉は姿を現さなかった。ダーングの警戒は、一層強まった。この『二本槍』で終止符を打たないということは、ここが〈野駆け〉の隠れ家だということに気づかれたのかもしれない。

ダーングは、日が昇る前に、『二本槍』と『おこじょの瞳』の宿主にそれぞれ伝言を頼み、ドナウトと見習いたちが、『黄色い鈴』という店の前で落ち合うよう取り計らった。それは、『おこじょの瞳』にいるドナウトに向かって、見習い

の無事を伝える意味ももった。
彼らが何事もなく玄関口へ向かったのを確認すると、ダーングは跡を追った。だが、その時、外套の裾を引っ張られ、ぎょっとした。足元に女の子がいたのだ。
「な、おい、何だっ」
見習いよりも小さいその子は、外套の頭巾からのぞく髪を、寒さで赤くなった頬に貼り付けながら、なにかごねていた。
「山にいきたいの、イッツェリ山に！　どこにあるの？」
ダーングは、視線をめぐらせた。ドナウトと見習いたちは、往来するアベドの波の向こうへ消えかけている。
「アベドを間違えているぞ。他をあたってくれないか」
ダーングは、引っ張る女の子の手をそっと払った。
「でも、聞いてこいって、えーっと……、あたちの〈育ての者〉が言ったの」
「どこにいるんだ」
歩きだしても、女の子はついてきた。彼女は、一瞬たじろいで、「あっち」と、辺り一帯を指さした。
「何だと。どこなんだ？　あそこの店か？　それとも通りの入り口か？」
女の子は固まり、黙した。
「……さては、迷子か」
ダーングのため息交じりの言葉に、女の子は斜めに頷いた。〈野駆け〉は、急いで見渡し、屈みこんで言った。
「じゃあ、〈警備の者〉のところに連れて行ってやる。そこで〈育ての者〉を待つんだ。いいな」
聞いた女の子は、きょろきょろとあてもなく周りを見渡した。分かっている

のかいないのか。ダーングは、子どものこの態度に覚えがあって、目をまわした。

「来い」

彼は、女の子の手を引いた。女の子は黙ってついて来た。

「今度からは、〈育ての者〉から離れるんじゃないぞ。誰も彼もが、親切に助けてくれるわけじゃない。気安く話しかけて、恐ろしい目に遭うことだってある。分かったか？」

「おじさんは、助けてくれるアベドなの？」

ダーングは、ちらと、子どもを見下ろした。

「君を〈警備の者〉に預ける。俺もこう見えて、今は忙しいんだ」

「あたちも忙しいの」

女の子はせかせか歩いた。今度はダーングが黙る番だった。彼は、人差し指と中指に巻き付く小さな指に、痛みを感じた。

〈警備の者〉が常駐する〈腕の屋（交番）〉に着くと、ダーングは女の子を引き渡した。女の子は、頭巾からはみ出る髪を払いながら、ダーングをじっと見送った。何か言いたそうだったが、結局、彼女の姿は行きかうアベドの集団に紛れ、見えなくなった。

見えなくなったのは、ドナウトたちもだった。ダーングは、予想したつくりの村行きの駅舎へ向かったが、彼らはいなかった。苦く思いながらも〈野駆け〉は、駅舎を管理する〈駅頭者〉に、探している集団を訊ねた。

「さあ。いた、と思いますけど……。でも、老師と五、六人の見習いなんて、村回りの時期、珍しくないですからね。お探ししている方たちかは分かりませんが」

〈駅頭者〉の男は、かぶっている帽子の硬いつばの下で、冷気により膨れた

瞼を一生懸命開けて言った。
「次の便はいつだ？」
「さあ。何せこんな天気ですから、鳥たちも飛ぶ気分じゃなくて」
ダーングは、さっさと駅舎から離れた。彼は、商業輸送に使われる竜便の発着場へむかうと、竜の操縦士に、つくりの村まで乗せるよう交渉した。
操縦士である〈竜使い〉は、あんたの体重分、荷物を減らさなきゃならない、と不服そうに言ったが、ダーングが〈野駆け〉の印を見せ、損失分の金額を払うと、黙って竜の背中にまたがった。
轟音をたてて、竜は熱気とともに飛び立った。〈竜使い〉は、つくりの村につくと、さっさとダーングから離れた。嵐を読み取って巣に帰る鳥のように。
村に降り立ったダーングは、聞き込みをし、村回りで訪れるであろう場所を次々と探した。だが、どこにもドナウトたちの姿はなかった。
彼は、仕方なく、この追跡生活で足りなくなった、食料や野宿の備品を買うために時間を使った。
そして、日も傾きはじめたころ。宿を探していたダーングは、とある師の人に声をかけられた。
それからだった。ダーングの道が狂いはじめたのは。

その師の男は、がたいがよく、黒く短い顎髭を生やし、深い眼窩の奥から、じっと対象を見つめる癖をもっていた。彼の背はダーングと同じであったが、歳はいくらか若かった。男は、胸に三本指を当て、少し頭を下げて挨拶をした。
「マーベンダークと言います。どうぞ、お見知りおきを」

ダーングは、彼を一瞥した。ドナウトを追いかけて『おこじょの瞳』にやってきた師の男だと、すぐにわかった。

「何か御用か」

「師の人ドナウトについて。私たちは少し、話し合う必要があるのではと思いましてね。……つくりの人、〈歌語り〉のヨァナーンさん」

マーベンダークは、意味ありげな笑みを浮かべた。

通りに面した軽食屋に行き、外の食事席で彼らは向かい合った。冷える外の席は、新聞を読む耳の遠くなった老人一人だけが座っており、首をすくめて歩く通行人が足早に通り過ぎていた。

マーベンダークは、しかし、寒さを感じていないようで、外套の一番上の釦を閉じておらず、そこに風が当たろうとも、震え一つ起こさなかった。

「あなたは、ある『資料』を追っていると聞きました。あのしがない老師が、休日気を紛らわすためにはじめた、たわいもない研究のことなんですがね。それで、率直にお訊ねしますが、王家はなぜ、そのようなものをあなたに追わせているんでしょうか。光の民（シスルア）は、なにかご興味がおありで？」

マーベンダークは、ずっと軽く笑いながら、低い声で喋っていた。まるで、馬鹿げた日常の出来事一つに皮肉を言っているように。

ダーングは、温まるために吸っていた葉巻の灰を落とした。片手をもう片方のわきの下に潜らせる。

ダーングは、自分が〈野駆け〉だと気づかれたことを読み取った。しかし、向こうからわざわざやって来るとは。ダーングは、師の男を見やった。

「私は、そんなことは知らない。私にとって大事なのは、光の民（シスルア）が何を考えているかではなく、忠実でいられるかだ。それは、あんたらも同じだろう？」

ダーングは、先ほどの質問に対してそう答えた。

マーベンダークは、目を細めてひそかに笑った。
「こんな忠実な犬がいたら、さぞ楽しいだろうな。……すると、あなたは何も考えていないということですか？　女王がなぜこれを命じたのか、まるで知らないと？　追っかけて終わりですか？　いやはや、それはない。何たって、あなたも私も、一人のアベドなんですから」彼も懐から葉巻を取り出し、火をつけた。
「どう煽ろうが、何を聞こうが、私からは何も得られん」
ダーングは、煙を慎重に吸った。「光の民（シスルア）のご意思を知りたいのであれば、実際に〈見えない死〉の現場に行けばいいんじゃないか？　そうすれば、なぜあなたたちの邪魔をするか、分かるだろう。それでも分からないのであれば、あなたたちの頭は腐っている」
「うーん、あなたはうわべだけで判断しているように思いますよ」
葉巻を吸った後、マーベンダークは口角を上げた。「四百年前のアベド、カメイユがこう言っていますね。『疑問を抱いて、はじめて相手を知ることができる』。あなたは、我々を知ろうともせず、突っ走っているような気がしてなりません。それって、すごく危険なことだと思いますよ」
「どうだろう。お前たちよりも、事の重大さは理解していると思うが。あなたたちの思想が及ぼす危険性も」
「本当に？　ぜひお話を聞きたいものだ」
マーベンダークは、いらいらと小刻みに灰を落とした。
「あなたがなぜそこまで忠義を尽くせるのか、私はすごく知りたいものです。誰でも、いつかはどこかで疑問を抱くだろうに。どうしてそんなに真っ直ぐになれるのだろう？」
「さあ。俺にはこれしかないからじゃないか？」

マーベンダークは顔色を変えず、両眉をあげて、頷いた。
「なるほど」
「お前は？　お前は、自分たちがやることに疑問を抱かないのか？　それとも、自分たちがやっていることしか信じられないのか」
「他の者がやっていることが信じられないからです」
マーベンダークは、まっすぐダーングを見つめた。「ですから、新しいものをつくるしかありません」
「他者を踏みつぶしても？」
「先に進むには、歩きますよね？　歩くには、ある時点を捨てて、別の場所へ足を延ばす必要があります。それを『踏みつぶす』と片づけるのは、表現が乏しすぎますし、心外です」
二人はしばらくの間、睨み合った。とうとう口を開いたのは、ダーングだった。
「……あんたらは、以前も、他者の命を使ってゆすりをかけたことがあるだろ。今回の見習いの件と同じように。それを心外だと？　本気で言っているのか」
マーベンダークは目を見開いた。とぼけようとしているのだと思ったダーングは、彼に迫った。
「いいかげん、演技をするのはやめろ。以前の件には証言者がいる。〈耕しの者〉のダンタラーケという男は、あんたたち緑の巨人の一員だったそうだが、どうやら仲間割れをしたらしいじゃないか。イエリオットの畑の件で」
マーベンダークは、しばらく目を丸くしていたが、すぐに笑みを浮かべた。
「あの、言っておきますがね、私たちのもとに来る者たちは、自らの意思でやって来ているんですよ。契約も、もちろん向こうの了承を得て交わしている。破った場合のことも伝えてある。だから、脅しはしていない。契約に従ったま

でだ」
「なら、今回の見習いたちの件はどうだ。あの子たちは何にも関係がないだろう」
「あの坊やたちは尊敬に値しますよ。誰かに助けを求めることができるのに、受け止めて、隠している。馬鹿ですが、まあ、彼らが本当のことを話したとしても、誰も本気で受け止めないでしょう。なにせ、保育部屋を出たばかりの見習いですから。忙しい仕事人にとっては、絵空事は勘弁、でしょ？」
ダーングは、燃やし尽くさんばかりにマーベンダークを睨みつけた。
「つまり？　お前たちはまだ、あの子たちを消すことを考えているのか？」怒りのせいか、軽く眩暈がしてきた。
「いやいや、消すのが目的じゃない。目的はあなたと同じ、『資料』ですよ。子どもたちは、ドナウトをゆするための駒であるわけで……。まあ、あの老師に見習い六人は多いですが、『資料』の方は、それ以上の価値がある。もし、あの六人の見習いがドナウトを動かしたのなら、彼らはこれからのアベドに、英雄と称されるでしょうよ」
マーベンダークは、悠々と葉巻を吸った。「……まあ、でも、その手も通用しなくなっているみたいですね」
ダーングは、驚きが顔に現れないようにした。なぜこの男は、ドナウトが見習いに価値を置いていないことに気づいているのか。ドナウトが、見習いなどどうでもよいと言ったのは、ダーングの前でだけだ。
マーベンダークは、ひょいと肩をすくめ、沈黙を埋めるがごとく、喋り続けた。
「あの夜、あの席で、あなたたちはずいぶん積もる話をしていたようですね。私は、あの時、まさか王家の犬が目の前にいるとは気がつきませんでしたが。

たしかに〈歌語り〉にしてはアベドを集めていなかった気が……」
ちょうど頭に浮かんでいた場面を言われたので、ダーングはぞっとしながらも、皮肉を込めて言った。
「敬意を示してくれたじゃないか」
葉巻を灰皿でもみ消す。その上から、マーベンダークが灰を落とした。それがダーングの袖に落ち、彼は「すまない」と言って、払った。
マーベンダークは、わずかに眉をひそめながらまた葉巻を吸い、椅子の背にもたれた。
「古くからの習慣というものは、ずいぶんと私たちを束縛する」
彼の顔が曇ったのは、その時だけだった。
「ドナウトが、見習いも自分の命も想っていないと分かれば、あなたは、私たちがもうそれほど動けないことを理解しているでしょう。けれど、あなたもまだ彼に付きまとい続けるのは、やはり『資料』が欲しいから、ですね？　私たちもまだ同じだ。だからこう言いたい。……私たちは、もう別の道を歩みはじめた、と。けれど、あなたがそれでも追うというのなら、光の民（シスルア）が正しいと思うのならば、いずれあなたは、あなたではなくなりますよ」
ダーングは、目を細めた。
マーベンダークは席を立った。もう話すことは、ないようだった。
「お前たちがやることは、いずれ明るみに出る」ダーングは言った。
師の人は振り返った。
「あなたは怒ってらっしゃるようですがね、もう一度言っておきますが、背を向けたそのアベド自身にも責任があるというものですよ。ダンタラーケしかり、イエリオットしかり。結果は彼らにも見えていたはず。協力せず、仲間の手を噛む者は、あなただって潰すでしょう。それとも、噛まれても放っておくんで

すか？　まさか。それじゃ自分が死ぬだけだ。……そう、私はそのために、長い年月をかけてきたわけじゃない」

では、と言って、マーベンダークは去っていった。

ダーングは、引き留めることはしなかった。どうせ問うても、霧のように掴みどころのない答えが返ってくるだけだ。

彼はくぎを刺しに来たのだろう。ここから先、どうなっても知らないぞと、わざわざ鼻先で指を突き立てて。

マーベンダークのひそかに力を宿す目が、頭に残った。

マーベンダークに会ってより、ダーングは、計画を再検討した。

（別の道を選びはじめた、と言ったな……）

それはつまり、ドナウトを追うことや見習いを使ってゆすることを、諦めたということだろう。

（いままでの唯一の救いは、向こうが、『資料』を持っているのはドナウトだと思っていた点だ）

彼らが何度もドナウトに直接交渉をしていたことを見るに、『資料』自体はすでに完成し、隠されていることを知らないのだと、ダーングは考えていた。

しかし、さっきのマーベンダークの言葉が、『資料』の隠し場所を知った、ということだったら？　ドナウトは関係なく、隠し場所から盗むめば、緑の巨人の目的は達成される。

（……いいや、もしくは、誘導作戦であるかもしれない。こちらに危機感を持たせ、隠し場所に案内させようとしているのかも）

ダーングは、つくりの村に留まるか、それとも別の村へドナウトを探しに行くか迷った。だがそこで、ある店を思いつき、はっとした。

（もしかすると、ドナウトはあの店に向かったのか？　逃げ場を失ったアベドが向かう先……。そうだとしたら、師の村だ）

ダーングの行先は決まった。あまり気が進まなかったが、それでも、これしか今は考えられなかった。

まだ太陽が昇り切っていない早朝、ダーングは、師の村へ発つ準備をした。窓の向こうの雪景色は、灰一色だった。

短刀を括り付けた革帯を巻き、外套に腕を通す。その時、手首を強く引っ張られる感覚があり、ダーングはぎくっとした。

声を上げる間もなかった。〈野駆け〉の姿は袖の中に消え、包む者を失った外套と革帯が落ちる音が、部屋に響いた。

気づけばダーングは、湿った地面を転がっていった。枝を折り、根に身を打ち、石に頭をぶつけ、泥まみれになりながら、長い距離を滑り落ちていく。

倒木に打ちつけられ、ようやくダーングの体は止まった。

あまりのことに息ができなかった。頭も働かない。

ダーングは震えた。痛む体に歯を食いしばる。しばらく、彼はそこで唖然とした。

鼻に、森の匂いが入った。

ダーングは、やっと肘をついて半身を起こした。体中泥にまみれ、雪で濡れている。寒さが肌を刺し、全身の毛が逆立った。

辺りを見渡すと、日の出前の群青が周りを包んでいた。木と、茂みと草、合間に、溶け残った白い雪と、ごろりと大きな岩が、沈黙してダーングを見ている。

〈野駆け〉は混乱した。

痛みに顔をしかめ、何が起こったのか、記憶をさかのぼる。外套に手を通したのまでは覚えているが、なぜこんなことが起きたのか、まるで見当がつかない。

（何だって言うんだ、こんなこと、魔法じゃなければできないだろうにっ……！）

そこでダーングは、はっとした。昨日、師の人マーベンダークが、話しの途中で、落ちた灰を払おうと右袖に触れたことを。そして、自分が手を通したのは、右袖だった。

（……まさか。……だとしたら、やつは、ただの師の人じゃ、ないというのか）

◆

なぜ彼が魔法を使えるのか—そもそもこれが魔法の類なのか（悪夢なら覚めてくれ）、ダーングには分からなかった。

とりあえず、ここから脱しなければならない。ここにはアベドも、寒さをしのぐ建物もない。荷物もない。ここへ来たのは、ダーングのみ。肉体と、身につけている服が、いまのすべてだった。前日に買った備品や食料は、宿に残さ

れたままだった。
悪態をつきながら、ダーングは冷静に、打撲や擦り傷の状態を確かめた。ひどくはなかったが、健全だった少し前を思うと、やはり不快だった。
頭上を見上げる。
こんな状態で、雪の残る森に一人でいるのは危険だ。しかし、あまり適当に彷徨うと、自ら早い死を招く。迷いが、致命的な結果を呼ぶ。
ダーングは、あたりを見渡した。放り出された場所は、斜面のずいぶん上の方だと推測した。雪からわずかに顔を出す針状の低木、生白い常緑樹、斜めに傾いだ薄葉の木……。それらが、山牙（やまきば）に、真珠木（しんじゅもく）、それに薄傾（うすかし）げの木と、エイネー北部山地にある原初の森に生息する植物だとわかると、ダーングはひとまずほっとした。頭がおかしくなりかけていたが、異国ではないようだ。この地がさっきまでいた宿につながっていると思うと、少し冷静になれる。それに、エイネー植物の知識は持ち合わせていたので、これである程度の飢えはしのげると判断した。
（ウゴル（柔らかい木の根。脂質を含む可食部が多い。おいしくはない）を見つけよう。それと、今は花の季節だ。寒かろうが、新芽は多くあるはずだ。……そして、この寒さには竜舌草（りゅうぜつそう）が欲しい）
竜舌草（りゅうぜつそう）は、少しの摩擦によって発熱する、自然の携帯防寒具として知られる草だった。外套のないダーングにとっては、必要不可欠だった。
まだ闇が深いため、日が完全に上るまで、彼は真珠木（しんじゅもく）の枝を折って即席の杖をつくり、狩猟に使えそうな石や、食べられる野草を探した。
幸い、日はすぐに昇ってきた。直線と曲線の織り交ざった木の乱立や、茂る葉の手が、さらに鮮明に浮かび上がる。けれども、金色の陽の光は出てこなか

った。

ダーングは仰いで、太陽を探した。どうやら、今日は曇であるらしい。のっぺりとした灰色の空に、彼は舌打ちした。木と、葉と、雪の連続が、時間と、距離と、理性を失わせる。

〈野駆け〉は、時折襲ってくる孤独の恐怖と闘った。取り巻く森は、無関心でそこに居続ける。肌を撫でる冷気が、孤独をいっそう強める。

静寂が殺しに来る。

救いは自分の中にしかないのだと、ダーングは焦る己を押しとどめながら思った。周りをよく見て、冷静になろうと努める。ここにあるものは、無知では敵だが、使い方を知っていれば味方になるのだ。

彼は、じっと、木の幹を観察した。

ようやく、まともに物を考えることができるようになると、ダーングは太陽以外で方角を見つける方法を探した。

木の幹に、密集した苔が生えていた。右側に緑のものが多い。そちらが日のよく当たる南だと、ダーングは読んだ。

（ここが原初の森であるなら、東南に自然の村があるはずだ。けれど、南への森はかなり広い。ここが自然の村からどれくらい離れているか分からない以上、下手に進んでは、たどり着けないかもしれないな）

彼は、北へ目を向けた。

（真っ直ぐ北へ行き、薬の村を見つけるのが妥当かもしれん。あそこは比較的、村が山に近いからな）

ふと、足元を見ると、木の根元に、明るい黄土色のものが、雪の下からのぞいていた。ウーリンもどきと呼ばれるきのこだ。名前の通り、ウーリンのような味がするのだが、いつものダーングは「味の物まね菌」として、好んで食べ

なかった。

だが、いまのダーングは、迷わず雪をかき分け採取した。一つを雪で泥を落とし、齧る。本日のささやかな朝食だ。ウーリンには味は劣るが、甘く、なめらかな食感がした。土臭いのは否めなかったが。

彼は、そうして斜面を北寄りに下り続け、蔦や石、野草を採取し、時に食べながら、何時間も歩いた。正確な時刻は分からなかった。

景色がすっかり明るくなり、おそらく正午を迎えるころ、木々の間を東梟（ホウーム）が飛んで行くのを見かけた。ダーングは追いかけた。東梟（ホウーム）は、東向きにしか巣穴を作らない、別名、太陽を見る梟と呼ばれる、苔色の猛禽類だった。学舎の一つにも名前が使われており、ダーングはその学舎の出身だった。彼は、無意識に救いを求めた。

東梟（ホウーム）は、アベド四人分の高さに作られた木の幹の巣穴へ、滑るように入っていった。ダーングは、こぶし大の石を真珠木（しんじゅもく）の杖の先に蔦で縛り、茂みに隠れた。

いくらとも分からぬ時間が流れていく。ダーングという存在は森に溶け、あたりを取り巻いていた警戒の空気は、わずかに緩みはじめた。

そのときだった。東梟（ホウーム）が巣から姿を現した。梟は優雅に飛び、ダーングの放った杖が、その美しい鳥を捕らえた。杖は頭を直撃し、失神した梟は、虚しく墜落した。

先ほどまで大いなる神秘を宿していた東梟（ホウーム）は、毛の塊となって、力なくぺったりと潰れていた。

ダーングは跪き、「ウリトラハ（我が命のためにそなたの命を終わらせたこと

を許したまえ)」と呟いた。大昔のエイネー語で、もとは実言葉(アウシェヌムン)から来ているが、今ではエイネーアベドも、魔導師でさえも使っていなかった。だが、ダーングはこの時、現在のエイネー語のどの言葉よりも、これが一番ふさわしいと思った。

あらかじめ砕いて尖らせた石で、喉を裂き、活力のために血を飲んだ。それから羽をむしり、内臓を取り出した。

ちゃんとした刃物ではないので時間がかかった。内臓と肉を雪に埋めて凍らせる間、ダーングは、ビムブという大きな葉を何枚か手に入れてくると、羽をくるみ、枝をとがらせて簡易な槍をこしらえた。

しばらくして、雪を掻いて凍った肉を取り出すと、それをまたビムブで包んで枝で囲んだ。背負った時に自分の熱を伝えないようにするためだ。羽の包みは外側に蔦で巻き付けて固定しひとまとめにすると、彼は包みを自分の背中につけ、蔦を胸の前で交差させ、縛った。

〈野駆け〉は、ウーリンもどきを食べるや、再び杖を取り、歩きはじめた。

歩けど歩けど、続くのは雪をかぶる森ばかり。曇天は、それらをよりいっそう単調なものにする。染みる寒さの中、ダーングは、常に指先まで温まっていることを意識した。

一日目の終わりはすぐに訪れた。ダーングは、まだ明るいうちに足を止め、寝る場所の準備をはじめた。冷える風をよけるため窪地を選び、細い木々の枝を蔦で結んで屋根にし、草や枯れ木で、間に合わせの壁を築く。どんなに無駄なく動こうが、寒さをしのぐための野営づくりは時間がかかった。そうこうしている間に、光はどんどん失われていった。

ダーングは続けて、火を起こす準備をした。地面にあけた穴に石を敷き詰め、途中で拾ったウグ(別名、喚きの木。細めで乾燥しやすく着火に向いているが、

火の粉がうるさく爆ぜるためそう呼ばれている）の枝で円錐をつくる。それから、東梟（ホウーム）の羽や枯草などを置き、焚き付けとした。

ダーングは胸元から、〈野駆けの印〉を取り出した。これだけは手元に残っていて良かった。光の民（シスルア）のまじないのおかげか、〈野駆けの印〉は身から剥されずに済んだ。

〈野駆けの印〉は、石と打ち合わせると、かろうじて火花が散った。何度も繰り返すうちに、火花はようやく、ウグの元へ遊びに行きはじめた。ウグの円錐が煙を吐きだしはじめた時には、もう辺りは闇に沈んでいた。

ダーングは息を吹き込み、酸素を送って火を育てた。風で消えないよう、慎重に。そして、一瞬も目を離さない。焦らず、忍耐強く待ち、世話をし続けること。それが、この赤い花をものにするための秘訣だった。

ウグは弾け、火は笑い、互いに熱を持って踊りはじめた。

ダーングは、ウーリンもどきを枝に刺し、あぶった。凍った東梟（ホウーム）の肉も焼いた。まわりはすっかり闇に沈み、冷え込みが激しくなってきた。

竜舌草（りゅうぜつそう）を見つけられなかったことを、歯がゆく思う。しかたなく、石を温め葉でくるみ、抱えて暖を取った。

時間は、死んだようだった。どこにも、過ぎていく印が見えない。ただ、ウグの枝が黒くなって崩れたり、火が弱まったりするので、ダーングは、枝をくべて火の世話をすることで、時間というものが経ったのを知るのだった。

ようやく、焼けた肉ときのこに齧りつきながら、ダーングは今日のことをやっと思い返した。

（俺は……、どこに向かっているのだろう）

東梟（ホウーム）の巣を見つけたときのことが、まるで太古の出来事のように思える。宿

にいた時のことを考えると、もはや夢のように思えた。
もしまっすぐ歩けていれば、あと数日で薬の村に着くはずだ。だが、それは希望の話で、事実とは限らない。もしかすると、離れているかもしれないのだ。
ダーングは、顔を掻いた。
(川が見つかればいいが。そうすれば、水の苦労をしなくてすむ)
彼は、掻く手を強めた。
さっき火に入れた石が熱くなっていたので、彼は抱えていた石と入れ替え、熱くなった石を自分の近くに寄せた。
(奴は、誰なんだろう……)
石を懐に抱いてうずくまりながら、彼は考えた。マーベンダーク……。突っ走る若駒だと思っていたが、あの腕に吸い込まれた瞬間を思い出すと、寒気がした。
〈野駆け〉は頬を掻いた。さっきから、変な痒みがあった。
(どっちにしろ、奴の警告はこのことだったわけだ。師の村へ行こうと思った時点で、もう間違いなのだと、奴はあの時そう言ったのだ)
ダーングは、また石を暖めた。
腹は満腹ではなかったが、その隙間には、怒りが満ちていた。

二日目。ダーングは、肉の残りと最後のウーリンもどきを食べ、胴着を使って雪を溶かし、飲んだ。それから、太陽が右から昇ってくるのを確認すると、行く方角を左に定めた。
歩きながら、ダーングは野草を採取した。この日はいくら暖かく、空気に緩

みを感じた。

この緑の迷宮を、十分な道具も食料もなしに歩く苦痛は、筆舌に尽くしがたい。さらにダーングは、疲労と、顔の痒みをどんどん感じてきていた。この原因を、彼は頭の中で探ってみるのだが、答えは見つけられなかった。

いらだちは、常にダーングの内側を取り巻いていた。疲労は思考を鈍らせた。それでも、ダーングは、自分を見失わない強靭な精神を、〈野駆け〉として持っていた。

滑る地面に耐え、岩を上り、倒木を越え、寄ってくる蚊や蠅に神経をすり減らす。筋肉が疲れて重くなってくる。彼はそれでも、歩き続けた。

森はいつまでも、まったく同じ様子を見せた。

次の日もそのような状態が続き、ダーングは、疲労を確実に蓄積しはじめた。三日目。彷徨い続けるダーングは、とある一つの岩で休憩し、残雪で水分補給をしようとした。だが、あることに気づいた。

雪が減っている。

太陽だ。太陽が、雪を消しはじめたのだ。白く希少な水分補給源を、光の球は攫って行きはじめた。この時だけ、ダーングは偉大なる日の光を呪った。日がかつての力を取り戻す中、彼は歩き続けることしかできなかった。

そんな〈野駆け〉を哀れに思ったのだろうか。一陣の風が、彼の顔を上げさせた。もしかすると、東梟（ホウーム）の恩寵かもしれない。風を読むために、杖につけていた東梟（ホウーム）の羽が、一斉に後ろへ向いたのだ。ダーングは、はっとして、風を嗅いだ。わずかに水の匂いがする。

ダーングは、すがる思いで、前に進んだ。雨の可能性も考慮に入れながら、とにかく前へ前へ急いだ。

東梟（ホウーム）は信用してよかった。疲れた耳にわずかなせせらぎが届いたとき、ダーングは走り出したくなるのをこらえなければならなかった。

何とか冷静になって、水の音を聞き分ける。自分の足音が、水の音を消してしまうかもしれないからだ。彼は右頬を掻き、一歩一歩を慎重に選んだ。

ようやく、巨岩の壁から落ちる小さな滝を見つけたとき、ダーングは膝の力が抜けた。滝は、わずかな滝つぼを作り、清き川となって流れていた。

ダーングは、岩肌を撫でるように流れる透明な水を、掬い取って飲んだ。胃袋に納まり活力源になっている東梟（ホウーム）に、この場所を示してくれたことを感謝した。

彼は、痒みのおさまらない顔を洗った。掻いて熱を持った皮膚に、水は心地よくしみたが、痒みは依然として続いた。

（どうなってるんだ……）

ふと、流れていく水の中に、白と赤茶の毛束が浮かんでいることに気づき、ダーングは、ぎょっとした。

（あれは……自分のか？）

恐る恐る、顔を撫でてみる。

右の頬に、さわさわと毛が生えているのが感じられた。頬骨から顎、そして鼻の頭から、目の周り、そして、耳の縁まで……。

自分の爪を見ると、泥とはがれた皮膚とともに、赤茶と白のまじった毛がこびりついていた。

彼は急いで手を洗い、顔を洗った。両手で顔をこすると、左目あたりは、まだつやつやとした肌が残っていることが分かった。しかし、顔にこびりついている謎の毛は、なかなか取れなかった。

「なんなんだ！　一体……」

呻きながら、ダーングはしゃがみ、水に自分の顔を映そうとした。

たが、滝つぼでは、はっきりと顔を映すことができない。水の中のダーングは、暗い影でしかなかった。

「ああっ！」ダーングは水面を叩いた。

震える指で、そっと右の頬に触れる。

彼はまた水面を覗き込んだが、やはり黒い像しか映らなかった。

これにはさすがの〈野駆け〉でも、恐れおののいた。

自分がどうなったのか分からないまま、ダーングは川に沿って、下流へ向かった。水、食用の雑草、きのこ、時には狩りをして、彼は腹の減りを紛らわした。

狩りは、初日よりうまくいかなかった。水鳥はよく視界に現れるが、ダーングが槍を投げる前に飛び去った。東梟（ホウーム）を捕獲した時はまだ体力が残っていたし、もしかしたら、単に事がうまく運んだだけだったのかもしれなかった。

梟の内臓を餌にして罠を仕掛けたりもしたが、一つは壊され、他は食いついてもいなかった。採れたのは小魚と、蝸牛（かたつむり）くらいだった。

夜になると川から離れ、冷気が上がらない場所へ移動し、火を焚いた。竜舌草（りゅうぜつそう）はいまだ見つからないので、焼け石で我慢した。採集した数少ない食料は、枝に刺して、焼いて食べた。

三日間、そのような状態が続いた。

鍛えられた〈野駆け〉も、しだいに意識が揺らぎはじめた。歩みも遅くなり、地面の小さな突起にもつっかえるようになった。いつでも獣や虫に注意を払わなければならず、常に緊張状態にあった。頬はこけ、目は窪みはじめた。

ダーングは、また、歩きながら、師の人のことを考えていた。マーベンダークの笑みを思い出す。

（奴は、俺を原初の森に放り出して、寒さと飢えとで、自ら死ぬよう仕向けたのだ）

ダーングは、その回りくどいやり方に、胸糞が悪くなった。邪魔であるなら、正々堂々かかってくればいいものを。

粘り気のある怒りは、だが、ダーングを力強くした。もはや、彼が死なずにいるのは、憤怒のおかげといってもよかった。マーベンダークの顔に張り付く笑いの仮面を引きはがす、ダーングはそれだけを望んで生きていた。

放り出されてから七日目の朝。ダーングは、息が止まる思いをした。

広くなった川の向こう岸で、野営をしているアベドの一団を見つけたのだ。

朝食を終え、片づけをしている。

ダーングは、驚喜の呻きを漏らした。しかし、すぐには声をかけなかった。顔を覆う毛を見て逃げられたら困る。彼は服を脱ぎ、それで顔を隠した。

杖を振りながら合図を送ると、気づいた一団は、頭を布で覆う泥まみれのアベドに仰天した。

「誰だ、お前は！　何をしている！」

初老の男が叫んだ。

ダーングは答えようとしたが、咳き込んでしまい、止まらなくなって膝をついた。杖が地面に転がる。噛むような空腹と、泥のようにまとわりつく疲労が、アベドを見たことで一気に爆発した。

かろうじて顔を上げると、二人の男が相談していた。離れたところに初老の男がいる。彼は、二人に首を振った。「何言ってるんだ、だめだ。何者かも分からんのに……」

二人は迷いを見せたが、そのうち左の方が、腕を下流へ向けた。

「もう少し下まで来られるか？」

しかし、〈野駆け〉は。もう顔も声も上げられなかった。

二人の男たちは、初老の男の警告を無視して、岸に止めてあった舟に急いで乗り、ダーングのもとへ漕いでいった。川の流れが穏やかだったおかげで、少し下流に行き過ぎただけで、舟は無事に反対の岸に着いた。

ダーングは、半ば引きずられるようにして舟に乗せられた。顔を覆う布が苦しい。それに気づいたのか、一人の男が布を取ろうとした。

ダーングは、とっさにその手を払った。

「やめ……ろ。毒を……もらうぞ……」

男はすぐに手を引っ込めた。ダーングはしかし、「とんでもないものを乗せてしまった」と思われないよう、言い直した。

「……触れなければ、伝染しない」

「刺されたのか？」

もう一人の方が、棹を持って漕ぎ出しながら訊ねた。ダーングは、そうだということにして頷いた。

反対岸につくと、初老の男が、荷を背負って、上流から歩いてきた。舟はまた少し、下流に流れてしまったらしい。

男は、ダーングを見るや、灰色の長い眉をぐっと寄せた。だが彼は、無言で腰の革袋を外し、舟から引き上げられたダーングに差し出した。

ダーングは受け取ったが、手元がおぼつかなかった。男の一人がその手を支え、ダーングの口元まで持っていった。

布の隙間から、ダーングはそれを飲んだ。果実の清々しい風味と優しい甘みが、乾いた喉と心を癒した。

「あ……りがとう……」

彼は押すようにして、革袋を返した。

「何があったんだ？」

さっき『刺されたのか』と聞いてきた男が訊ねてきた。人懐っこそうな丸い目をしている。ゆったりとした綿の服に浮き上がる派手な渦巻き模様。立ち襟には、商の人の印である、紐の結び目を模った記章がついている。商の男は、ダーングと目を合わせず、ずっと右の頬骨あたりを見ていた。

ダーングは気にせず、とっさに話を取り繕った。

「……道に、迷った。八頭鹿（はっとうしか）（額に七つのこぶがある鹿）、追っていた……。けど、魔法動物に、持ち物、奪われて……。もう七日も、彷徨って……」

「うわあ、それは〈貪欲白蛇（ベレーバシムトウ）（旅人の荷物を奪い、道に迷わせる魔法動物）〉の仕業に違いない！」

商の人たちは、同情の呻き声を上げた。

「……すまないが、……食べ物を、くれないか……」

ダーングの言葉に、丸い目の男は、初老の男に顔を向けた。男は、気が進まなさそうに、重々しく荷を下ろし、結局は、ポウと干し肉を出してくれた。

「狩りの人か？」

初老の男は、胡散臭そうに、ダーングが食べる様子を見つめながら訊ねた。
ダーングは食べながら、その問いに頷き、名乗った。
「エデスク。狩りの人エデスクだ……」
しばらく無言で食べ続け、ようやく噛みつくような飢えがおさまると、ダーングは言った。
「……すまんが、ここがどこだか、教えてくれるか。北に向かって歩いてきた、つもりなんだが」
「この辺は、道にはなっているが、名前はない。場所で言うと、原初の森や薬の村の北、そのまた果てだ。エイネーの最北部だ」丸い目の男が、さっきよりも喋れるようになった布男を見て、安心した表情で言った。
彼の言葉を聞いたダーングは、ひやりとした。村を目指して歩いてきたはずが、離れていたなんて。彼らに会えたのは、奇跡としか言いようがなかった。
「……薬の村までは、どれくらい離れている？」
「歩きで、ざっと五日くらいさ。エイネー馬だと、もっとかかる。道がひどいからな。地面はぬかるんでいるし、傾斜が多い。歩いて行った方が、意外と速かったりするんだよ」
ダーングは聞きながら、彼らの身なりを観察した。色とりどりな商人服は、長旅のせいで色褪せ、汚れている。加えて、商品が見当たらない。荷物は、初老の男が背負うものと、舟にあるものだけらしかった。
「……あなたたちは、〈鼠商人〉か」
ダーングの言葉に、若い二人は苦笑し、壮年の方は微かに顔をしかめた。
〈鼠商人〉は、使用品を集めて売る商の人たちのことだった。使用品は正規で買い取ったものではなく、廃棄物から掘り起こしたものがほとんどで、綺麗であればそのまま売っていた。価格は安いが、保証がなく、ときにはぼったくる

こともする。だが、集める品には、値打ちのある品がまぎれていることもあるため、それを収集家へ高値で売ったりしていた。そんなことから、質の悪い風来坊商人として、エイネーでは認識されている。

〈鼠商人〉が荷馬車を使わないのは、他の商の人と区別させられているからだった。〈鼠商人〉は荷馬車の使用を許可されていない。よって、手押し車だったり、舟だったり、試行錯誤しながら、あっちからこっちへこっそり店を広げ、収入がおぼつかないと、お得意様の所へ行って、珍品を勧めていた。

「何かお買い求めになりませんか、と言いたいところだが、あんたは一文無しだからな。値打ちになりそうなものも持っていないし……」

「おい」

丸い目の男とは別の、顎のとがった男が、彼を制した。「エデスクは、これからどうするつもりなんだ？」顎のとがった男は訊ねた。

「もしよければ、同行させてほしい。薬の村まで」

初老の男が、それを聞いて、馬鹿にしたように笑った。

「わしらはそんなところまでは行かない。木魂(こだま)海岸まで行くのさ。国外の客と落ち合う約束をしているんでね」

ダーングは目を細め、考え込んだ。

「……では、食料を少し分けてはくれないだろうか。道は、教えてくれれば、後は自分で行く」

初老の男は、しばらく嫌そうにダーングを眺めていたが、やがて仕方なく、食料と水を分けた。

「そんななりでも、お前もアベドみたいだからな。ほら、これをやるよ。……薬の村は、ここから南東へ行かないとだめだ。この川をまた渡って、さらに先だ」

彼は、山犬の毛皮の外套と、古びた綿製の服、それに「これもいるだろう」と、竜舌草（りゅうぜつそう）を渡した。「こんな寒い花の季節だっていうのに、何もなしでほっつき歩くなんて、馬鹿にもほどがある」と言いながら。

「ありがとう。恩に着る」ダーングは、布越しにそう言った。

〈鼠商人〉たちは、再び舟に乗りこむと、ダーングを反対の岸へ戻した。

「塗り薬をやろうか。虻とか蚊とか、百足にも効く。蜂にも少々」

目の丸い男が、ダーングの顔を気にして、薬の瓶を一つくれた。何も聞こうとしないのが、かえってよかった。ダーングは素直に受け取った。

「ありがとう」

丸い目の男は不安そうだったが、頷いた。初老の男と顎のとがった男は、さっさと棹を手にして、岸から離れて行った。

「迷ったら松の木を見つけて、それに沿って行けばいい！　いずれたどり着くだろう！」

最後に丸い目の男は叫んだ。ダーングは、手を振って感謝の念を示した。

「おい、もうやめろ」

岸から離れるや、初老の男は、丸い目の男に言った。

「魔法動物かもしれないだろう。あの顔をみておかしいと思わなかったのか。必要以上に優しくすると、向こうはつけあがって、災いをもたらすぞ」

「しかし、ギシェルさん、さっき、奴のことをアベドだと言ったじゃないですか」

「ふりに決まっているだろう。ああいうのは騙されたふりをして、さっさと欲しい物を渡して、離れるのが一番さ」

丸い目の男は眉をひそめ、振っていた手を静かに降ろした。

それから四日間、緑の森を彷い続けてきたダーングにとって、一軒家の発見は、〈鼠商人〉に会ったときよりも嬉しいものだった。暖かく、安全な場所で寝ることができる。そう思えただけで、力が何倍も増した。

そこは、薬の村の最も端にある一軒だった。アベドの出迎えを期待していたダーングだったが、近づくにつれ、無人であることに気がついた。庭の植木は伸び放題で、割れて横倒しになった植木鉢が散乱しており、屋根には雑草が湧いている。

ダーングは、一つの窓に近づくと、中を伺った。

砂ぼこりで曇った硝子越しに、何脚かの椅子が逆さまになって置いてある。窓を叩いたが、応答はなかった。

家の周りをうろうろしていると、裏口の扉が歪んでいるのを見つけた。取っ手は壊れている。彼は、渾身の力を振り絞って、体を扉にぶつけた。何度かやっているうちに、扉は軋みはじめた。やがて、木枠は割れ、蝶つがいが飛び、裏口は崩壊した。疲労が蓄積している自分の体より、この扉はくたびれていたらしい。

ざらついた埃の匂いがする。台所だ。壁には、調理器具や食器が整然と並んでいた。ダーングは目を見張った。家の中は、驚くほど几帳面に整えられていた。鍋はしっかり洗って干され、陶器の食器は綺麗に積み重なり、へらや匙は種類ごとに分けられて、壁に吊られている。

奥の部屋から、食事台の端が見えた。黄色く霞んでいる。居間だろう、そちらも小綺麗で、埃が積もっているのは否めないが、木の椅子や、皮張りの長椅子は、座面を上下に組んで端に寄せてあり、食事台には布がかけられていた。

左手には、大きな窓と、黄ばんだ窓かけが引かれている。部屋が黄色く見えているのはそのせいだ。窓かけを寄せると庭が見え、通り過ぎてきた植木鉢の墓場が現れた。

ダーングは、台所へ戻り、食料を探した。〈鼠商人〉たちから食料をもらったが、足しになるものがあれば、なんでも欲しい。いまのダーングは、紙切れでも食べたかった。盗人とは、罪悪感と抗いがたい生命の欲求に引き裂かれる怪物なのだと、鼻息荒くしながら思った。

「ウリトラハ、ウリトラハ」

ダーングは謝罪の意を込めて呟いた。

上の棚、下の棚、右の棚、左の棚。かまどの中や、鍋の蓋を開ける。食器棚の引き出しを開けた時、火打ち箱を見つけた。火打ち箱の中には、着火を速めるメーリという薬液が入っているものなのだが、この火打ち箱のメーリは、三分の一ほど残っていた。

しかし、問題の食料は、どこを探しても見つからなかった。

彼は、火打ち箱に加えて、小さな雪平鍋と柄杓、それに、果物用刃物も見つけると、台所を後にした。

居間の先へ進むと、階段を見つけた。二階は、廊下を挟んで向かい合わせに、四つの部屋が並んでいた。

はじめに、手前の部屋を二つ開けた。造りも残されているものも、ほとんど同じだ。机、椅子、本棚、寝具等、生活に必要な最小限の家具が、使用者を失って死んでいる。埃が表面を覆い、色を消していた。ダーングは、机の中や棚を漁ってみたが、何もなかった。

（だが、この家具、掃除すれば使えそうなのにな……）

飢えと疲れの中、ダーングはぼんやり思った。誰も住まないでほったらかさ

れているのは、何か理由があるのだろう。ここは中心部から離れているから、使い勝手が悪かったのかもしれない。それに、今では薬の人のほとんどが、製薬所や薬剤研究所と呼ばれる集合施設で寝泊まりするようになってきている。こういった一軒家は消えかけているのかもしれない。

ダーングは、奥の二部屋を調べた。

右の部屋を開けると、物量に圧倒された。日用品が壁のように積まれている。久しぶりに文明の物を大量に目にしたダーングは、しばし混乱した。

丸まった絨毯や、窓かけの替え、掃除用具、薬草調合の器具、使わなくなった燭台や衣類、鞄、新聞、本、植木鉢、花瓶、桶、竿、椅子、椅子、椅子、時計や、飾りの人形などなど……。入り口で立ち尽くすダーングは、その中に服のひと塊を見つけた。それから、大きく頑丈な鞄を見つけると、そこに服と、台所で見つけた物、さらに布きれ、紐など、使えそうなものを入れた。

ひとしきり済むと、今度は隣の部屋に移った。

扉を開けると、眩しいほどの光がダーングの目を瞬かせた。

正面に、窓かけのない窓があった。部屋は右手に長く造られている。窓の前には机があり、天板の下には薄い引き出しがあった。その下には、移動式の棚がしまい込まれている。

天板下の引き出しから開けると、じゃらじゃらと音を立てて数種類の種が現われた。大きいもの、尖っているもの、赤黒いもの、つぶつぶしたもの、縞模様が入っているもの……。だが、ダーングが驚いたのは、長方形の陶器、三つだった。これらは、エーメヤと呼ばれる砂糖菓子用の陶器の入れ物で、大抵は長方形で、上辺が蓋になっていた。

青い花が描かれているエーメヤを開けると、飴がいくつか出てきた。白っぽい結晶がくっついている。考えるより先に、ダーングの舌は飴を舐めていた。

甘さが、舌を貫いた。彼は呻いた。手の平の飴は、たちまち消えた。森では手に入らなかったその甘みと風味、そして、つくりの人と砂糖の力に感服した。

残りのエーメヤにも砂糖菓子が入っていたが、今日は一粒だけにした。持っている水が底をつきはじめていたのだ。唾液を出して脱水症状になっては本末転倒だ。ダーングは、エーメヤを尻の隠しに入れた。

その後、隅に積まれた木箱も見ていったが、ほとんどがらくただった。空になった茶葉の瓶や、空のエーメヤ、酒や果汁飲料の瓶に、値札や切手。新聞の菓子広告の切り抜きに、磁器の入れ物、金属の入れ物。

（収集家なのか？）

彼は、ぶちまけたがらくたを隅にやった。薬の人が薬草ではなく嗜好品の容器や紙くずを集めるとは……。この部屋の持ち主だったアベドは、変わり者のようだ。ダーングは、瓶とエーメヤを全部振って中身を確認しながら思った。

そのとき、一つのエーメヤから紙が出てきた。ダーングは舌打ちして、それを懐にしまうと、作業に戻った。

しばらく探し続けていたが、やはり他に菓子はなく、唯一見つかったのは、蓋の開いていない、小さな酒瓶一つだった。

だが、これだけあれば大収穫と言えるだろう。この部屋の持ち主が無頓着なアベドだったことに、ダーングは心から感謝した。

一階へ下りた彼は、ふと思うことがあり、洗面所を探した。

自分の顔を確認しておきたかった。痒みは治まっているが、ごわついている。それに、右目が少し重くなって、開けづらかった。変な病気をもらっていないといいが。

洗面所は階段の下にあった。ダーングは、おそるおそる戸を開けた。はっきりと目を開けるのが恐ろしかった。そうして、鏡に映ったものに、彼は言葉を

失った。

水垢で曇った鏡から、目玉の付いた毛の塊がこちらを覗いていた。顔半分を覆ってるのは、赤茶と白の毛で、肌が剥き出しの部分は、荒れたり、表皮が剥けたりして、桃色になっていた。白い襞もあちこちにできている。

ダーングは、そっと右頬を撫でた。固く短い毛が、びっしりと生えている。鼻の頭、口の周り、額に至るまで、まるでダーングという顔を潰すように。毛は右の瞼にも及び、それが、目を重たくさせている原因だった。

ダーングは、右目の下瞼を下げた。縁の皮膚が、黒く、厚ぼったくなっている。

（これは……、まるで犬じゃないか……）

ダーングは、再び鏡の中の自分を見つめた。

そのとき、恐怖が駆け上がった。毛の山から覗く瞳は、ダーングを戦慄させた。

彼は、逃げるように立ち去った。

空き家から少し離れた森の中で、ダーングは野宿をした。まだ冷えこみはあったが、前より暖かくなっていたし、それに、あの自分がいる家には戻りたくなかった。

（……今さら、何を急いでも遅い）

今まで追っていた本来の獲物のことを思い出す。

（ドナウトは『資料』をどうしたのだろう。〈目〉は彼を見つけたか？　手に掛けてしまっただろうか。マーベンダークは、『資料』を手に入れたか？　……あ

の見習いたちは、無事だろうか……）

山犬の外套にくるまりながら、ダーングは森の闇を凝視した。時折、ウグの焚き火が、ぱちぱちと爆ぜる。

ダーングは、干し肉を齧りながら、今後について考えた。

まず、無事に薬の村へ着かなければならない。それから体力を戻し、情報収集をする。

そこまで考えてダーングは、自分の顔のことを懸念した。顔を覆うものが必要だ……。

彼は、竜舌草（りゅうぜつそう）をこすって手足を温めながら、身を横たえた。しかし、尻にエーメヤが入ったままになっていて、ダーングは呻いて引っ張り出した。同時に、紙切れも出てきた。後に見つけたエーメヤに入っていた紙だ。半身を起こし、炎の光にかざすと、何行か書かかれていた。

「ごめんなさい、ラキエィヤ。育ててくれてありがとう。それと、名前をくれた女王様、私を薬の人へ導いた影の人も。

でも、誰も悪くないのです。ごめんなさい。ちゃんとできなくてすみません。

これを見つけたアベドに、祝福を」

ダーングの瞳は静止した。それから、紙は炎へと差し出された。手紙は黒くなって歪み、やがて消えた。

〈野駆け〉は、ウグの火の粉が外套につかないよう注意を払いながら、眠りと覚醒を繰り返し、静かに朝を待った。

彼は、保育部屋の中で、足元にまとわりつく小さな金髪の男の子と会話する幻想を見た。

次の日。ダーングは、嫌々ながら再び空き家に入り、騒ぎを免れるための頭巾や布を探した。最後に庭へいき、薬草や食用野草を採った。そうして、名残惜しくも、文明の城から背を向け、ダーングは再び原生林へ戻った。

二日後。ようやく〈野駆け〉は、目指していた薬の村にたどり着いた。村に入る前に顔を覆ったが、左目だけで見る世界は、不便だった。

薬の人たちは、顔を隠す男に目を丸くしたが、声をかけることはしなかった。初めて見る顔だが、どこかの療養所の患者だろう、病か呪いか、とにかくお大事に、彼らは無言を通すことでそう伝えた。

ダーングは、彼らの視線を無視し、まっすぐ〈潤の種門（ミーラバトウク）〉へ向かった。〈潤の種門（ミーラバトウク）〉は、預金や引き出しができる場所で、彼は手続きを済ませてようやく金を手に入れると、やっと一人の文明者として蘇った。それは、言い表せないほどの勝利の味がした。

蘇った証に、ダーングは村の端の小さな宿をとった。宿の者たちは温厚で、ただただ寝床と食事と沐浴を勧めた。

ダーングは、無口なアベドとして振る舞い、影のように過ごしたが、宿の者たちは、惜しみなくダーングの世話を焼いた。他にそれという客がいなかったせいかもしれないが、やはり、ダーングの瞳の淀みと、体の肉の落ち具合が、彼らを心配にさせたのだった。彼らは、薬の人に診てもらうことを勧めた。ダーングは、彼らの指示に従っておかないと、よけい事を大げさにしてしまいかねないと思ったので、素直に従った。

宿にいる間、彼は、女王陛下に現状報告の手紙を書いた。内容は簡潔で実直だった。手紙の最後に〈野駆けの印〉を捺印すると、彼は管理塔の〈郵便部〉へ持っていった。

女王からの返事は、すぐには来なかった。ダーングは気長に待った。体に力がみなぎってくると、彼は市をめぐり、武器や旅道具を揃えた。

仕事もせず、のうのうと宿暮らしをしているアベドというのは怪しまれる。仕事人としての責任を全うしていないからだ。そういうアベドは霧散アベドと呼ばれ、周囲からの信頼を失った者、無能者として見られる。だからダーングは、宿の者に「手紙の返事を待っているのだ」と、居続ける理由を言った。それ以上は、聞かれない限り、黙りつづけた。しかし、宿の者は、金を払ってくれるならいつまでいても構わないと、あまり気にしなかった。

数週間後、月は変わり、緑の月（五月）に入った。その頃、ダーングのもとに一人の伝令がやって来た。小さな細身の青年だったが、引き締まった体つきをしており、彼はダーングの部屋までくると、淡々と訊ねた。

「なあ、月の部屋は上向き、太陽の部屋は……？」

「どこにもない」

これは〈野駆け〉の合言葉だった。〈野駆け〉の青年は、合言葉を認めて頷いた。

「上の部屋（光の民（シスルア）を意味する〈野駆け〉の隠語）からのお返事だ。よくやってくれた。印は、まだ持っているんだよな？」

「ああ」

青年は、手紙を渡し、任務をまっとうするや、さっさとその場を後にした。

ダーングは部屋の戸を閉めると、手紙を広げた。円形に、でたらめに文字が並んでいる。

ダーングは、その文字円の上に、〈野駆けの印〉を置いた。すると、印の縁にある格子の隙間から文字が現れ、それ以外は隠された。彼は、読んでは少しづつ回し、一文を解読した。

「　ジキトワズ　シロヘノ　キカンヲ　マツ　カイフクヲ　ユウセンセヨ　」

それからダーングが宿を去ったのは、すぐだった。彼は馬を借りると、森へ再び姿を消した。

回復を優先とあったが、ダーングとしては十分すぎるほどの休息だった。彼は、一刻も早くエイリアレル城へ戻りたかった。

十分な食料とエイネー馬がある城への旅は、ゆったりとしたものだった。顔を見られるのを防ぐため、鳥便も使わず、馬で小さな道しか通らなかったが、それでも、以前の旅よりずいぶん易しかった。

しかしながら、心の内は違った。『資料』の行方が分からないままなのが、気がかりだった。女王陛下は帰還を命じたが、ダーングはまだ、仕事は終わっていないと分かっていた。

◆

綿虫が飛び交っている。山犬の毛皮にくるまるダーングは、目を閉じ、無意識に右頬を撫でた。

馬でひっそりと旅をしてきたせいで時間がかかってしまったが、目指すエイ

リアレル城までは、あと少しだった。馬はすでに師の村で引き渡したから、青の真中山（エィレスィルアトゥア）をあと半日も歩けば着くだろう。

もう緑の月も中盤にさしかかり、次の綿虫の月（六月）が近くなりつつある。飛び交う綿虫は、まるでそれの知らせのようだった。

頬を撫でていた指は、右瞼の縁に触れた。前よりも固くなり、目尻が後ろへ裂けている気がする。

この顔では、もう誰も俺だと分からないだろう。

（これも、奴を捨てた呪いか……）

幼い少年の顔が目に浮かぶ。長く思い出さなかった顔だが、ここのところ、彼の顔はよく出てくようになった。

あの空き家で見つけた、収集家の手紙を思い出す。

「育ててくれてありがとう、ラキエィヤ……」

ダーングは薄目を開け、闇を見つめた。

（……ヒルガオ、見習いチャルー、我が育ての子。そう言う資格もないだろうが……。もうお前も、この俺を見て、俺だと分かるまい）

それがいい事なのか、悪い事なのか。ダーングには、分からなかった。

うかつに毛皮を齧った綿虫が、転げ落ちて、死んだ。